

云掘鯉之淀劉達注淀者如淵而淺也李善引之以注江賦之澗故云澗與淀古字通也江賦注魏都

賦注並無處字此恐衍說文澗澗涇也王念孫曰澗之言定也其涇定在下也按如淵而淺之處必有澗澗故轉注謂之澗也是條舊及山田本尾張本昌平本曲直瀬本皆無廣本亦標澗字無文選以下

數字獨下總本有之今錄存刻版本有文選以下字與下總本同蓋後人依別本補錄也

〔東雅地輿〕倭名鈔に文選江賦を引て澗は讀てヨドミといふ俗に淀の字を用ひてヨドといふ澗と澗とは古字通す如淵而淺處也と注したり淀の字もと西域傳に其水渟居といふ渟の字と音同じといふ事あり轉注さらば水止曰渟といふものなり今も俗にヨドムなどいふは凡事の渟滯せるをいふなり萬葉集抄にはヨドとは深くして浪などもたずのどかなる所をいふなりと見えたり

〔倭訓栞前編三十六〕よど和名抄に淀をよめり寄門の義にや水のとごほりたへたる所をいふよど川などは也古今集に

淀川のよどむと人は見るらめど流れて深き心あるものを六田のよど大河のよどともに萬葉集にみゆ

〔八雲御抄五〕淀

むつたのよど大みよなせのまづら川あすか川おほかはよど大万みよど山古今

〔藻鹽草水邊〕淀

河よど水のよどみ瀧つせの中にもよどいへりおほよど○中

山城淀○中高瀬淀内河

○中七瀬淀○大河淀○六田淀○中略

大淀○中伊勢○下略

〔箋注倭名類聚抄一〕涯岸

集注云水邊曰涯五佳反涯隙而高曰岸岐之

〔箋注倭名類聚抄二〕按歧謂屹然有限之貌與切訓歧留際訓歧波段訓歧太同○中爾雅集註十